［自伝小説］

わが道を求めて（第四回）

人間をはぐくんでくれるもの

長崎　明
さしえ　竹内秀明

一九八七（昭和六二年）年は、「臨教審」の最終答申や国土庁の「四全総」発表やらで、あれやこれやの議論と運動に明け暮れた。本研究所は八月七日の「臨教審」答申の情報をキャッチするや、直ちに反対声明を用意し、日本科学者会議新潟県支部と共同して、同日県庁記者クラブで発表した。さらに三十数名からなる臨教審研究部会を発足させ、その成果をもとに九月十三日、公開によるシンポジウムを開いた。日頃貧之はしていても、いざという時には、それなりに動ける力がついてきた、といえそうである。それにしても、新年早々というのに、独立国たる我が国の首相がアメリカにまでご挨拶に出かけねばならぬものなのか。

去年の古い暦が新しい暦に変わっただけの正月で、それで世の中が変わったわけでもないが、「なにがめでたいか、ばんざいか」なんぞとほざいて、独りへそをまげてみたところで、誰も振り向いてもくれない。やっぱり世間並みに「おめでとう」「おめでとう」と言って回り、めでたそうな顔の一つもしてみなくてはなるまい。

今年は辰年なので新聞に「建つ年」という建築会社の広告が目につく。実は昨年あの建築屋さんに私の家も建て替えて貰って、新築の家で老妻と二人、つつましやかな越年ができた。やっぱり、めでたいといわねばなるまい。今年はあんまり腹の「立つ年」であってほしくない。

ところで、この自伝小説、河上肇の「貧乏物語」ではないが、「貧乏士族」・「貧乏士族」が繰り返された。もう結構とおっしゃる読者もおいでだろうが、いま暫くお付合いいただきたい。本研究所のように、貧乏の中から何か活力が出て来るかもしれません。

維新後の士族の階層変動

○矢部

「貧乏士族」というけれど、木本さんの指摘のとおり、そしてまた長崎さん自身もお話のように、明治維新以後の士族はそんなに貧乏だったといえるかどうか。

確かに、突如武士という身分がなくなり、別の道を歩まなければならなくなったのだから、彼等の社会的変動には、社会的階層変動というタテの移動と、地域的移住（ミグレーション）というヨコの移動とが、同時併行的に、そして急激に進行した点に特徴がある。

しかし、その時代を根っからの平民として生き抜いた人びと（階層）と比較して、その社会的変動がより大きく、かつより急激だったにしても、より悲惨だったといえるかどうか。

○長崎

私にとってもその点は大問題です。維新以後、武存、信吉、武、明と四代を経てはいるのですが、維新の時、例え足軽でも士族だったことが、長崎家に何をもたらしたのか。確かに一部の外国人は、明治維新を「貴族革命」と見ているようです（たとえばスミス、一九六一）。日本の社会学者の中にも「明治維新による士族の経済的下降移動は否定すべくもな

い。しかし、下降移動しなかった平民が、もともと窮乏していたことを見落としてはならない」との指摘（安田三郎、一九六六）があります。

安田は、その著書「社会統計学」（丸善、一九六九）の中でマルコフ連鎖論を展開し、社会現象の移り変わりを確率過程モデルによって解明しようとしています。

第1表　祖父と父の主職別および本人の現職別・士族・平民の割合（%）

職業	祖父		父		本人	
	士族	平民	士族	平民	士族	平民
農業者	7.4	92.6	7.1	92.9	4.5	95.5
中小企業者	14.1	85.9	14.3	85.7	17.1	82.9
専門職	61.5	38.5	37.5	62.5	22.8	77.2
管理職	53.8	46.2	27.3	72.7	29.3	70.7
大企業ホワイトカラー	60.7	39.3	21.8	78.2	15.1	84.9
小企業ホワイトカラー	—	—	16.7	83.3	10.1	89.9
大企業ブルーカラー	16.7	83.3	12.0	88.0	7.5	92.5
小企業ブルーカラー	14.3	85.7	9.4	90.6	9.3	90.7
その他	23.4	76.6	39.2	60.8	18.2	81.8
計（平均）	12.7	87.3	12.7	87.3	12.7	87.3

「1965年ＳＳＭ調査単純集計表」（安田三郎，1966年11月）

彼によると、明治維新以後百年を経た今日なお、維新の初期に社会的優位を得た士族は、その影響を持ち続けているという。

彼は一九六五年（維新後九七年）無作為抽出の全国成年男子二〇二七名（うち旧士族一二・七%、旧平民八七・三%）を対象に調査して、第一表の結果を得ている。

まず職業別に見ると、祖父の世代に士族が優位を示す職業は、専門職六一・五%、大企業のホワイトカラー六〇・七%、管理職五三・八%で、いずれも士族構成比一二・七%をはるかに上回っている。因みに、この一二・七%に満たないのは農業者だけで、七・四%にすぎない。その大部分は恐らく維新後の新規開墾・集団入植者であろう。これに比して平民は、その構成比八七・三%に対し、農業者九二・六%、中小企業者八五・九%、小企業ブルーカラー八五・七%となっている。これが父の世代になると、士族は専門職三七・五%、管理職二七・三%、大企業ホワイトカラー二一・八%に対し、平民は農業者九二・九%、小企業ブルーカラー九〇・六%、大企業ブルーカラー八八・〇%を示し、職業の階層間差

異がやや縮小してきたように見える。しかし、維新の時に士族だった家柄では二代目でもまだかなりの優位を得ている。

これが本人の世代（維新後三代目）になると、士族の場合、管理職二九・三％、専門職二二・八％、中小企業者一七・一％、大企業ホワイトカラー一五・一％がその構成比を上回り、平民は農業者九五・五％で却って微増を示すが、続いて大企業ブルーカラー九二・五％、小企業ブルーカラー九〇・七％、小企業ホワイトカラー八九・九％が平民構成比八七・三％を上回り、階層間差異がかなり縮ったことが判

第2表　父および本人の学歴別、士族・平民の割合（％）

在学年数	父		本人	
	士族	平民	士族	平民
なし	10.7	89.3	0.0	100.0
1～6年間	9.5	90.5	7.7	92.3
7～9	11.5	88.5	9.9	90.1
10～12	17.8	82.2	14.5	85.5
13～14	29.1	70.9	26.3	73.7
15年間以上	52.9	47.1	21.1	78.9
計	12.7	87.3	12.7	87.3

出典：前掲

第3表　年収別、士族・平民の割合（％）

年収入	士族	平民
50万円未満	10.8	89.2
100万円未満	12.5	87.5
100万円以上	18.0	82.0
計	12.7	87.3

出典：前掲

る。しかし、それでも士族が専門職、管理職、大企業ホワイトカラーでは根強い優位性を保持している。すなわち、三世代経ってもなお、平民は士族の社会的優位性を超えることができない。別の調査だが、大学教授は、大正・昭和生まれの若い世代においてすら、士族の比率が二二・〇％で、その構成比一二・七％を約九％も上回っているという。

次に、父および本人の学歴別、士族・平民の割合（第二表）を見ると、父の世代では士族は在学年数一〇年以上で士族構成比を上回り、特に一五年以上で五二・九％に達しているが、平民は在学年数九年以下が平民構成比を上回っていて、それ以上の学歴は士族に比し相対的に下回っている。つまり、俗な言い方をすると、平民はなかなか上の学校へ進学できなかったことを意味する。この傾向は本人の世代になっても、やや階層間差異を縮める程度で、依然として士族の優位性が受け継がれている。年収についても同様の傾向がみられる（第三表）。

○竹中

馬鹿に数字が並んじゃったけど、結局のところは、明治維新に伴って起こった士族の社会移動の中で、いわゆるタテ移動（職業に見られる階層間移動）は、い

くらかはあったものの、やっぱり平民の方が低いのは変わらなかったってことですね。そして、その過去の栄光を高学歴によって保持し続けたということになるのでしょうか。

○長崎

タテ移動についてはそう見ても良いでしょうね。この研究報告者の安田氏は、「士族が明治維新の社会変動によって社会的下降が強いられたのは事実であるが、彼等の貧困が注目され、社会政策の対象となったのは、彼等の絶対的窮乏の故ではなく、彼等の過去（維新以前）における地位との比較における相対的窮乏の故ではなかったか」と述べたうえで、そのような推論をマルコフ連鎖によって論証を試みている。

○矢部

ほほう、そのマルコフ連鎖とは何だね。

○長崎

そうですね。私も正直なところ、マルコフ連鎖は良く判らないのですが、要するに、父の階層（上層、下層）と子の階層（上層、下層）による行列式を作り、四つほどの仮定を前提としながら、この行列式が世代経過によって、どのように収束するかを見ようとするもの、といえるのではないでしょうか。

安田氏の述べるところによると、「もし社会が完全移動の社会ならば、士族・平民間の差別的影響は一世代で消滅してしまう。完全移動からほど遠い社会は、一度つくられた身分的差別が幾世代も消滅しない」ということです。

○木本

つまり、明治維新は必ずしも万民平等の完全解放の世の中をつくったわけではなかった。人民による人民のための人民の政治体制ができたわけでなく、それどころか、帝国憲法によって幕府よりもっと権力的な天皇制が布かれた。それに、維新の原動力になったのは若い士族出身者だったのだから、ますます士族が優遇されたことになる。

○長崎

そうですね。この点について安田氏は次のように述べています。

武士階級が明治維新に際して財産を没収された事実はなく、逆に家禄に応じて秩禄公債を下付され、拝領の家屋敷、土地は廉価で払下げとなり、さらに多額の士族授産資金を受けた。

この安田氏の指摘は痛烈に私の胸を打つのです。

しかし、考えて見ると、維新前には同じ士族の間でも厳しい身分関係があり、身分イコール家禄であり、その家禄に応じていろいろな恩典があったわけですから、それがまた階層間差異の消滅をいっそう遅くしてしまったといえそうです。

維新後の士族の地域移動

○長崎

前回（一六号）の末尾に私は「維新直後、気位ばかり高くて金もうけができず、生きるための手職も持たない下級武士は、役場の吏員か、教員か、警察官か、軍人か、はたまた郷里を捨てて外地に移住する以外に食う道を持たなかったわけです。わが長崎家も結局のところそれらの中の何れかを選ぶ以外にありませんでした」と書いた。

士分にとりたてられていたとはいえ、僅か五人扶持ていどの足軽では、「家禄に応じて」ということでは、雀の涙ていどの秩禄公債しか与えられなかった。それだけではとても食べて行けないので、武存も公債をもとにして第六四銀行設立の発起人に加わったりしたが、やはりうまくいかなかったのであろう。現在の村松の家の縁先に駄菓子を並べて売ってみたところで、これもタカが知れている。

その貧乏暮らしの中で、信吉（私の祖父）は本家の伯父に育てられ、新潟尋常中学に学んだ。当時中学に進学できるのは余程裕福な家庭に限られていたから、恐らく伯父がその才能を見込んだのであろう。中学を修了した信吉は当時新津にあった中蒲原郡役所の書記になり、その後請われて十全村役場の助役

を三十年間も務めた。

信吉の長男に生まれた武も、苦学して村松中学に学んだ。村松中学は今の村松高校で、私の家のすぐ裏手にあるが、当時信吉は新津勤務だったので、武は村松の親戚の家から通学した。入学以来剣道に打込みすぎて肋膜や肋骨を傷め、進学を断念、母校の理化学実験助手をしながら、試験検定で小学校本科正教員の免許を受けた。

こうして、維新後二代目の信吉は吏員、三代目の武は教員の道を歩んだ。それは正に典型的な下級武士の道であった。しかし、文学への思いを抱く信吉も、大正デモクラシーの夢にあこがれる武も、それぞれの道に安穏としてはおれなかった。信吉は何度か笈を負って上京を試みるが遂に果たさず、武は一九二五年、満二二才の五月、妻ノフ、長男明（生後一年七カ月）、長女悠子（四カ月）を伴って台湾に移住し、公学校教員となった。これこそ、階層変動で食いはぐれた旧士族（それも貧乏士族）の地域的移住（ミグレーション）の一類型であった。

私の常ならぬ弁舌を、それまで黙って聞いていた小倉先生が、やおらトレードマークのベレー帽をぬぎ、くゆらせていたマドロスパイプをはずして、口を挟んだ。実は、私はここで、前記の安田氏がマルコフ連鎖の理論を使って、この旧士族のミグレーションをどう捉えているかを話そうとしていたのだが……。

士族末裔の家風（子どもの仕付け）

○小倉

明治維新に伴って士族がタテやらヨコやら社会移動したという話は、確かに興味ある課題だが、少し熱が入りすぎるのではないかね。長崎先生の「自伝小説」というから、そろそろ「おいたちの記」にでもなるのかと思ったのに……。

つまりね。長崎先生。あなたが、自分は士族の出だと意識しすぎているのではないの。先程来のお話だと、先生とこ、長崎家というのは、言っちゃ悪いが、ずい分と貧乏だったらしい。そんな貧乏士族が、維新当時の士族の優位性というか、有利性というか、そいつをいまだに持ち続けられるわけがないのではないかね。だから、あんまり士族にこだわった話にならない方が良いと思うよ。そりゃね、あれだけの社会変動だったのだから、その時代に生きた個々の

人びとは、それはそれなりの苦労があったとは思うけどね。

ふだん寡黙の人は、口を開くとかなり当を得た意見をズバリと云うものだが、この小倉先生もその一人である。私もいささか虚を衝かれた形で答えた。

○長崎

ええ、そうですね。私も社会全体の変動と個人的レベルでの変動とをゴッチャにしているつもりはないのですけど、個人の意識というか、意欲というかがどうであれ、ある人の社会的格付がいったん決まると、それが百年経っても消えない、それどころか、その優位性を保持し続けているとの指摘は、私にとって大きなショックだったのです。それは統計的手法、確率論を駆使して実証された冷厳な事実には違いない。わが家のことを振り返っても、おおよそ当たっていると認めざるをえない。

私は単純な運命論者ではないのだが、常日頃「士族の家に生まれたのだ」という意識が心の隅のどこかにあって、それが私のこれまでの行動を支えてきたのかもしれない。そういうことも含めて、家格、家風をどう捉え、それを家族なり社会なりの一員としての自分の意識にどう反映させるか、また、その家風を後の世代にどう継承したら良いのか、こういう問題意識じたいが士族の末裔なるが故の思考ということになるのか。

越後がっこう物語　巻2
父ちゃん母ちゃん　出番だよ！

第1部〈手記編〉ほんねで語る父母のおもい
第1章　親と子の私学
第2章　父母たちと教師たち
第3章　手をつなぐ父母たち
第4章　「父母の会」はわたしの学校

第2部〈ルポルタージュ編〉"私学よ輝け。
青空に翔べ　私学の子らよ
一人ぼっちの卒業式
父母に寄せるおもい

第3部〈座談会〉父母のねがいにこたえる
「学校づくり」をめざして

編集・発行
にいがた私学教育を守る父母の会
新潟県私立学校教職員組合連合
950 新潟市弁天橋通1-13-13　私学会館内
☎ 025-286-7600

発売中・定価￥1,000

○竹中
　あらあら、ずいぶん難しいお話になっちゃったのね。長崎先生ご自身、何か思い当たる節でもおありなのかしら。

○長崎
　そうね。あれは私が十七才のとき、前にも話したけど、台北高校生だった頃、村松の祖父母を訪れ、一週間ほど故郷というものを味わったことがあった。
　そのとき、朝起きると必ずちゃんと座って、祖父母に対し「お早うございます」と朝の挨拶をすることは勿論、それから家中をはたき、ほうき、ぞうきんでお掃除し、汲み立ての井戸水で神棚と仏壇のお水を取り替えて拝礼することを教えられた。考えてみると、当時の台湾での日常生活もそれとほとんど変わりなかった。つまり父からそのように仕付けられていたのだが、束の間の郷里での滞在の間に、同じようなことをさせられたことに軽い驚きと、ささやかな抵抗を感じたのを覚えている。
　そのとき、祖母が乾いた仕上げ布巾で仏壇を拭きながら、「お前は士族の家の長男だ。やがてこの家を継いで貰わねばならん。この家のチリ一つ、ゴミ一つ、みんなお前のものなんだよ」と、聞かせるでもなく、独り言でもなく呟いたのが、ずきんと心にこたえた。同じことを、父母ではなく、祖母の口から、束の間の郷里の家で、それも、台湾と新潟と遠く隔たった郷里の家で聞かされたことの重みを感じたわけです。
　時は昭和十六年八月でした。十月には東条内閣成立、十二月にはいわゆる「大東亜戦争」の始まる直前でしたから、祖父は黙っていましたが、当時十全村役場の助役で時局に明るかった祖父には、私が夏休みを終えて台湾に戻ったら、再び生きて逢えるかどうか、の思いがあったに違いありません。

○竹中
　随分きびしいお年寄りだったわけですね。

○長崎
　いや、特に厳格だったわけではなく、士族の家の年寄りとしては当然だったのではないか。今日、「年寄りっ子」とか、「じいさん子」、「ばあさん子」と云われるのは、年寄りが年寄りとしての責任を放棄しているからではないか、と思います。

（ながさき　あきら＝にいがた県民教育研究所会長）